

美術科の主張

1 教科で育みたい人間像

5 美術という教科で学ぶことにより、人々の生活はどのように変化するのでしょうか。画家や建築家、イラストレーターなど、造形表現に携わる専門家になるのであれば、美術の授業で学んだことを25直接的に生かしていくことができそうです。しかし、このような専門家を育成することが中学校美術科の役割ではありません。感性豊かに、表現や鑑賞することの喜びを味わいながら、人生を歩んでほしいというのが美術科の願いです。

10 美術科で育みたい感性とは、様々な対象からよさや美しさなどの価値や心情を感じ取る力のことです。美術科では特に、対象のもつ美しさや生命感、心情、精神的・創造的価値といったものに対する、感性を中核としています。

15 感性を豊かにするためには、心を大きく揺り動かされるような感動を経験することが必要なのだと考えます。表現では、自分が表現したいことを、自分が納得できる表現ができた時などに実感でき

るでしょう。鑑賞では、想像力を働かせて対象を見ることで、自分の見方が深まったり、新たな価値を発見できたりした時に味わうことができると思います。このような営みは、美術の創造活動の喜びそのものです。

20 そうした経験を重ねた感性は、さらに美しいものやよりよいものへの欲求を強めていくのではないのでしょうか。この探求には終わりがなく、人間の成長に伴い、高次化し続けていくものであると、美術科ではとらえています。

25 そのような姿勢をもつ人であれば、創造活動（表現や鑑賞）を通して、自分と向き合うとともに他者や世の中を理解しようとし続け、人生を豊かなものにしていくのではないのでしょうか。

30 以上のことをふまえ、美術科で育みたい人間像を、「感性豊かに、創造していく人」としました。

2 育みたい人間像に迫るために教科で大切にすべきこと

40 授業の中で、子どもたちが創造活動の喜びを味わえるように、美術科ではまず、**題材との出会い**を60大切にします。題材が提示される場面で、「表現したい」「おもしろそう」などといった子どもたちの興味・関心を高めることができれば、その後の創造活動への意欲は大きく後押しされることでしょう。そのような題材を提示するためにも、授業者自65身が、その魅力を肌で感じ、よさを伝えたいという想いをもつことが必要です。

50 題材との出会いだけでなく、題材の魅力や、授業で扱うことの価値、子どもたちの発達段階に合っているかということなど、題材選定・構想にあつ70ては様々な視点も必要です。創造活動の喜びにつなげるためのよりよい題材をめざした研究は、

55 日々続けられなければいけません。また、美術科では、一人ひとりの異なる表し方や感じ方、つまりは個性・人格を尊重していくことも

に、**かかわり合い**を大切にします。授業におけるかかわり合いでは、形や色などの造形的要素を基に、言語活動が行われることを想定しています。

表現では、自分の作品に表現しようとした考えや思いを伝えたり、他の人の作品から感じた印象などを話し合ったりすることで、作品への考え方や表現方法の工夫について理解を深めていくことができるでしょう。特に、構想段階において、構想を明確化したり、主題を基に構想を深めたりできるようなかかわりを大切にします。自分の作品について語ることは、自分と向き合うという内省的な側面もあります。鑑賞では、作品から感じたことや考えたことなどを話し合うことで、感動を共有したり、自分とは異なった見方や感じ方があることを知ったり、作品をより深く味わえるようなかかわり合いをめざします。